

氏名(本籍)	かわい とく はる 河井徳治(鳥取県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第846号
学位授与年月日	平成5年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	哲学・思想研究科
学位論文題目	スピノザ哲学論攻
主査	筑波大学教授 文学博士 工藤喜作
副査	筑波大学教授 文学博士 廣川洋一
副査	筑波大学教授 文学博士 藤田晋吾
副査	筑波大学教授 Ph. D. 荒木美智雄
副査	筑波大学教授 加藤慶二

論文の要旨

本論文において著者は、スピノザ哲学が「自然と人間の共属性」という視点に立つ哲学であり、またこの視点に立って人間の自由と至福がいかに可能であるかを問う倫理学であることを明らかにしようとする。この意味から本論文は三部に分けられ、第一部において「自然と認識」、第二部において「自然と人間」、第三部において「自然と社会」が取り扱われる。

第一部 自然と認識

第一章「神即ち自然」において著者は、先ずスピノザ独自の神の内在思想が、神と世界の間を能産的ならびに所産的自然との関係に転換させることによって自然を二重化すると主張する。そしてその際問題となる産出関係を認識における平行関係との関連において明らかにし、スピノザ思想の独自性を強調する。その独自性は心身関係にまつわるデカルト的なアポリアを実体一属性関係において引き受け、類比を比例に還元して得た比の保存思想によって、能産的自然の能産性からこのアポリアを解明したことにあると主張される。

第二章「形而上学的原理としての無限概念」において、著者はスピノザ哲学の核心は無限概念にあると主張する。それは有限に内在できる無限である。このため、表象と知性、持続と永遠、多と一とが彼の場合二分法によって分離されず、かえって両者の二重性が無限概念に現れてくることを指摘し、さらにその際無限様態の果たす役割を明確にする。

第三章「延長的自然の構成原理」において著者は、スピノザの自然学がデカルトを踏襲したものでないことを、運動と静止の概念、運動量保存則において明らかにし、これらが彼の形而上学の原

理と矛盾しない整合性をもっていることを明らかにする。

第四章「認識の問題」は、先ずスピノザにおける知覚構成の原理が自然学原理の知覚構造への応用であるという特殊性を明らかにする。次いで感性的知覚、理性、直観知の構造を明らかにし、真の認識の構成原理が精神の受動から能動への転換構造にあることを示す。

第五章「操作と認識」は前章に続いて認識を問題とするが、ここではとりわけ認識の操作性を明らかにする。ただしこれは自然を操作的対象とするものでなく、むしろ自然や人、人間相互の合一を目指す倫理的実践的な認識であることを強調する。操作的認識論の弱点は存在論との関連が見失われ易い点にあるが、この点スピノザの場合存在論を踏まえたところに大きな特徴があることを示す。次いで比例計算を例にした認識種別の意義を解明する。

第二部 自然と人間

第六章「自然の現実的本質、コナトゥスの概念」において、著者はこの概念が人間の自由と隷従という倫理的対極を導く概念であることを明らかにし、その整合性の論拠を論じる。次いで現実性の根拠は本質と存在の結合にあるから、コナトゥスはその固執の対象がもつ永遠存在と持続存在の両義性に依拠して両義的になることを明らかにする。また、本質概念には認識規定のみならず、存在維持機能の面が現れているから、ここにアリストテレスの生命概念との異同が論じられ、また機能と存在についてはホッブス、デカルトとの観点の相違を問題にする。

第七章「人間の現実性の徴表と指標、完全性の概念」においては、先ずスピノザが概念と観念の相違に基づいて倫理的価値概念の改鑄を行ったことが論じられる。次いで完全性の概念が、神の存在論的証明を果たす概念装置から、個物の実在性の連続的な多寡を示す概念に変遷を遂げるが、このスピノザ独自の発想が導かれる所以を明らかにする。

第八章「善の概念」は前章を承けて善悪の概念がスピノザの場合消極的である所以を示し、それが人間的努力の完全性と異なることを具体的に明らかにする。さらに感情が混乱した認識の一種であることを示し、この感情の本性から人間の隷従状態を明らかにする。隷従から自由へ、受動から能動への指標として善の概念が改訂され規定される所以を、コナトゥスの連続的変化の捉え方から明らかにする。

第九章「相互行為の徴表としての感情」において、著者はスピノザがいわゆる共感を相互行為の中での感情の模倣として位置づけたことを明らかにする。そしてこの模倣の構造の中から認識と実践のいわゆる循環的構造が解明できるのである。感情の模倣は愛憎二極を生む両面価値性を伴う。スピノザの指示するものはこの受動感情からの脱却であり、それと対照して能動感情について述べる。スピノザの感情理論は市井の生活感情の分析にとどまらず、宗教的实践に関わる道義心や宗教心に結びつけられる。そして能動感情が、実は信仰によって得られる実践に伴う感情と通底していることが明らかにされる。

第十章「信仰の模倣とその批判」においては、著者は啓示宗教の基礎がいかなるものとして彼によって理解されたかを示し、また信仰の確実性がいかに彼の言う道徳的現実性の概念から分析され、信仰も一種の模倣において成り立つことを明らかにする。次いで信仰と現性の立場の相違を明確に

し、求められる実践内容が両者において一致するにもかかわらず、神観の相違から信仰の立場は服従と模倣の論理を脱しきれないことを示した。

第十一章「模倣からの脱却、神への知的愛」においては、スピノザの狙いが倫理的自由の追求にある以上、模倣からの解放が求められたと主張される。そして隷従から自由への努力の目標は神への知的愛と称される倫理的価値としての最高段階に求められるが、その際コナトゥスの概念自体がこの神への知的愛の概念と結びつくものであることが示され、神との合一、人間相互の合一の意味が論じられる。

第三部 自然と社会

第十二章「スピノザによるホッブズの社会哲学批判」において、著者はスピノザが社会哲学においてホッブズに対する覆面の批判者であったと主張する。そこで著者は両者の観点の相違を自然権と自然法の関係を中心に論証し、ホッブズに対する批判の眼目が、その人工的国家形成理論にあることを明らかにした。

第十三章「法と政治の原理」において、著者はスピノザが自然的国家形成理論の立場に立っていたと認め、それを具体的に解明する。先ず自己保存原理という自然法則から法の原理を導き、実定法の領域を自然の法則と統一的に扱おうとするスピノザの独自性をホッブズとの対比において論じる。社会哲学の領域で能産的自然に対応するものは、共同の権利と称せられることを指摘する。法の実体が共同の権利のうちにあるならば、政治の原理はそれからいかに基礎づけられるかを問題とする。これは支配の原理に自然的な制約が設けられたことを意味すると主張される。

第十四章「支配と自由」は、先ずスピノザにおける法と道徳の意味を明らかにする。次いで政治の原理が支配の構造を止揚して始めて正当化されることを示す。そしてこの場合民主制がこの原理を現実化できる最適なものであった根拠を明らかにし、自由を保証する政治の可能性と支配の限界を明らかにしたスピノザの政治理論の独自性を説く。

審 査 の 要 旨

本論文は著者多年のスピノザ研究の成果として評価されるべき多くの点がある。以下その主なものを列挙する。

①著者がスピノザ研究から得た「比の保存」の思想を平行論と難解な「無限数」属性の解釈に適用し著者なりの解決を見たこと。②スピノザ哲学の要と見なされる無限概念について綿密な研究をしたこと。③スピノザの自然学における運動量保存法則とその存在論的意義を明確にしたこと。④ホッブズとの関連から、スピノザの幾何学的方法、認識の操作性ならびに社会哲学の意義を明確にしたこと。⑤認識種別における『知性改善論』から『エチカ』への移行についての緻密な研究。⑥個物における形相的（永遠）本質と現実的本質の関係に独自の見解を打ち出したこと。⑦共通感情の根拠として感情の模倣を挙げたことなどである。

以上の諸点において氏の研究は世界の第一線の研究水準に比して何ら遜色がないことが認められ

る。だが問題がないわけではない。それが本論文の論述の対象が自然から社会にいたるもで広範囲に及んでいるため、論述の密度に多少の不揃いが見られることである。

以上の問題点があるが、この論文が今日の日本のスピノザ研究に画期的な意義をもっていることは否定できない。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。